

子どもたちに伝統文化の体験を

あぜ道一面に真紅の彼岸花が咲き出しました。「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通りに、ここのところ急に涼しさが増し、秋の深まりが身にしみます。

この季節になると秋の夜長とともに月がとっても美しく、虫の音色が心をロマンティックにしてくれます。私の幼少の頃のことです。ススキや紫苑、りんどう、野菊を飾り、アン入りのふかし饅頭をお供えする十五夜や十三夜の月見行事。子ども同志、隣家を回り、こっそりとお供えものの味を楽しみました。「子どもにお供え物を食べられると豊作になる」ということで大人は知らぬふりでした。それでも大人たちはしっか

りと目を配って子どもたちを愛情に包んで子育てをしていたのです。今はなつかしい思い出です。

十月九日の夜（このかんや）、十日の夜（とおかんや）も、今はなつかしい思い出です。豊作の米で餅をつき、ワラを束ねて、「このかんや、とおかんや」と口々に叫びながら地べたをたたきます。八百年前、源義経が兄・頼朝に疎まれて東北に落ち延びる時、村人たちが馬のひづめの音を隠すためにこの行事を行ったと言い伝えられ、私の小学生の頃までこの慣わしがありました。毎年、毎年、お餅を食べながら祖父にその話を聞かされました。

伝統的な行事がどんどん消え去っ

ていく今日ですが、幼い時に体験したことは今もなつかしく記憶に刻まれています。保育を通して子どもたちの心に残る伝統文化の体験をさせてあげたいものです。



お月見会